

# 大阪募集物語

それは、ある風の強い日でした。僕は地連の募集業務を密着取材するため、大阪にやってきました。大阪城にほど近い、合同庁舎内に自衛隊大阪地方連絡部があります。そこで出迎えてくれたのは、スポーツマンらしい爽やかな笑顔の、身長2m近い大男でした。物語はここから始まります。

地連はとって忙しい？

募集班長の肩書きを持つその人は、木戸口和彦3等陸佐。もう一人、大阪弁が耳に優しい大阪市南部担当の吉田幸司2等陸佐も加わって、まずは大阪地連の特徴や仕事内容などを説明してもらい、さらに募集に関して話を聞きました。地連の隊員募集といえば街頭でガタイのいい若者を見つけて「キミ、自衛隊に入らないか？」などとナンパのごとく声をかける、なんてイメージが僕にはあったのですが「古いですねえ。今はそういう方法はとりませんよ」と木戸口3佐に笑われてしまいました。

自衛隊地方連絡部、略して地連(ちれん)は各都府県に1個ずつ、それに北海道に4個の計50個あります。地連は自衛官等の募集、退職自衛官の就職援護、体験搭乗や体験航海、



地連はアイデアが重要です/  
前大阪地連部長 笠原将補

部隊見学の受付等、自衛隊と地域との窓口として活動しています。

大阪地連は規模・募集実績ともに全国でトップクラス。本部と18個の出張所等があり、地域において実際に募集活動に従事しているのが出張所等の皆さん。出張所等は土日も開けているので休みは不規則。隊員を集めるための広報活動を「募集広報」といい、学校や自治体、地域を回ったり、協力団体や募集相談員というボランティアなどを通じて自衛隊の募集に関して広報を行っているんだ

そうです。それらの合間を縫って各種ポスターの貼りかえなどもやるなど、聞けば聞くほど仕事内容は多岐に渡ります。中でも「広報官」と呼ばれる職務は、志願者の受験から入隊まで面倒を見る、募集の最前線に立つ仕事だそうです。

「地連というと最近では、のん気なイメージがあるでしょう？ 実際はとっても忙しいんですよ」とおっしゃるのは、募集課長の川瀬昌俊1等陸佐。時には課長自ら防衛大学校を志す受験者に母校の出身について親身に話すこともあるといいます。大阪という土地は自衛隊にあまりなじみがなく、隊員募集についてはかなり逆風のきつい地域なんだとか。それなのに優秀な募集成績を誇っているのは、すごいことだと思えます。

「地連というのはアイデア次第である程度自由に仕事を組み立てられます

から、おもしろいですよ」とおっしゃるのは、地連部長の笠原直樹陸将補(取材当時)。実際、大阪独自の施策として「大阪のおばちゃんクチコミパワーに期待する」女性防衛モニター「自衛隊みてみ隊」や、国家安全保障について大阪大学大学院との共同ワークショップを開催。自衛隊に対する理解を深め、地道にファンを作ることを怠っていません。

直接的な募集業務における努力はもちろんです。こうしたいわば「種まき」にあたる部分の広報活動をきちんとやっていることが、大阪地連の優秀さの秘密なのかもしれません。

## 「広報官 募集班長も世話になり」

さて、ここからは実際に募集業務のあれこれを見せてもらうことになりました。まず最初は広報官に同行



とにかく明るい大阪地連／左から川瀬1佐・吉田2佐・木戸口3佐

し、この春、2等陸士として陸上自衛隊に入隊する若者の家を一緒に訪問させてもらいます。お世話になったのは、阿倍野出張所の村岡俊2等陸曹。笑顔が爽やかな、感じのいいお兄さんといった雰囲気です。

「広報官の仕事はその人が入隊するまで、きちんとフォローするのが基本。時には入隊後も相談に乗ったりすることもあります。人の一生を左右することもありますが、その分やりがいもありますね。応募する人は私を通して自衛隊を見るわけで、いわば自分が自衛隊の代表みたいなもの。それだけに、印象が悪くならないように常に気をつけています」

自衛官なら誰でも一度は入隊の時間にお世話になっているのが、広報官。「今の将官だって誰かが世話したんですよ」本部庁舎で吉田2佐や木戸口3佐が笑って言っていたのを思い出します。そうこうするうちに、村岡2曹の運転する白いライトバンは路面電車の走る大阪の下町を駆け抜け、入隊予定の岩田君の家に到着しました。

この日は入隊当日の打ち合わせが主目的。「大丈夫、おっちゃんに任せといたら心配ないからね」ちよつと緊張気味の岩田君と、心配顔で同席するお母さんに、ゆつくりと順を

追って説明していきます。と、話が入隊後のことに移った時、お母さんが突然尋ねました。「あの、次はこの子、いつ帰って来れるんでしょう……？」昔から自衛隊にあこがれていた、という岩田君と違い、お母さんの方は少し不安な様子。村岡2曹は心配を解きほぐすように、一つひとつの質問に真剣に、かつ笑顔で答えます。そんな村岡2曹の印象を尋ねてみると「何でも相談できるお兄さんみたいな人かな」と岩田君。お母さんは「優しいし頼り甲斐があるし、最初にこんないい方とめぐり合えて本当に良かったと思ってるんですよ……」ちよつと涙ぐむお母さんの姿を見て、隊員と家族を結ぶパイプとしても、広報官の大切な役割があることを実感した瞬間でした。そういえば本部庁舎でお会いした全国自衛隊父兄会（自衛官の子息を持つ父兄の会）大阪府支部連合会の会長・松山洋三さんも「私らには自衛隊のことがなにもわかりませんから、広報官の方が頼りなんですよ」とおっしゃっていたのを思い出しました。

### 自衛隊と地域社会のかけ橋

「広報官のやりがいが一番感じる時？ 無事入隊した子が前期教育を終え、地連に顔を出してくれたときですかね。見違えるように立派になっ



入隊するまできちんとフォローするのが基本です／村岡2曹

た姿を見ると、つくづくこの仕事や  
つてて良かったなと思います」移動  
する車の中で村岡2曹はそう答えて  
くれました。

次にかがったのは募集相談員の  
岡田さんのお宅です。募集相談員と  
いうのは市町村長と地連部長から委  
嘱されるボランティアで、地域社会  
のアンテナみたいな存在。自衛官の  
募集事務の一部は、法律で都道府県  
や市町村の仕事とされているので  
広報官は、募集相談員の方ともマメ  
にお会いして助言を受けます。

「最初はガチガチに堅かったんで、も  
うちよつと肩の力を抜いたほうがえ  
えよ、とアドバイスしたんです。で  
も根が真面目やし、よう頑張ってる  
と思いますね。この人やったら、自  
分の息子でも安心して預けられます」  
実際に元自衛官の息子さんを持つ岡  
田さんは、村岡2曹をこう評します。  
逆に村岡2曹にとって岡田さんは、  
お父さんのような存在なのだとか。  
いつも人を育てる立場の広報官も、  
地域社会から育てられて一人前にな  
っていくんですね。

募集に際してはこのほか隊友会  
(自衛官のOB会)なども協力して  
くれているそうです。先の父兄会会  
長と一緒に会った、大阪府隊友  
会の山下照夫会長も「私は自衛隊が  
大好きですからね。イベントへの出



大阪府隊友会の山下会長(左)  
自衛隊父兄会大阪府支部連合会の松山会長(右)

募集とは、人を育てる仕事  
さて、募集の仕事では当然、学校との連携も密でなければいけません。各地区隊には学校系の隊員がいて、担当の学校にお邪魔しては募集パンフレットを置かせてもらったり、進路指導の先生とお会いしたり、志願者の多い学校では説明会を開いたりするそうです。その学校めぐりにも同行させてもらいました。行き先は府下の私立ではトップクラスの進学校として名高い清風高校。毎年、防

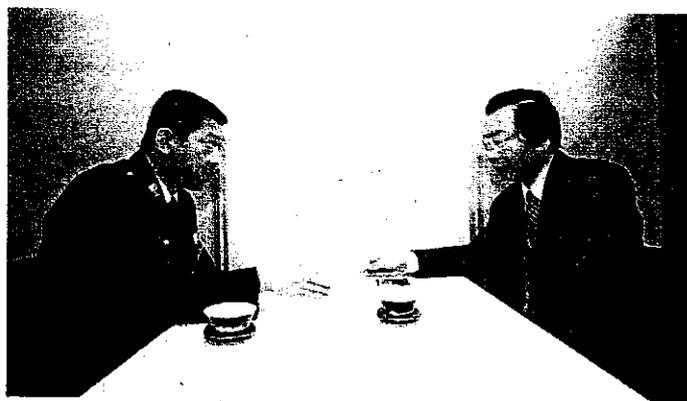


募集相談員の岡田さんはお父さんみたいな存在です

席なども、あらゆる面で協力しますよ」と力強いお言葉をいただいていたのでした。

募集とは、人を育てる仕事

衛大学校・防衛医科大学校を受験、合格する生徒さんがいるそうです。担当は大阪市南部を受け持っている鈴木孝弘1等空曹。スポーツ刈りと制服の似合う、一目で誠実だとわかる雰囲気の人です。



清風高校進路指導部の林部長と調整する鈴木1曹

まず、進路指導部長の林先生と面会。この日は防衛大・防衛医大合格者についての報告らしく、資料をばさんで真剣なやりとりが交わされました。その後、校長の平岡先生にもごあいさつにうかがいました。「鈴木さんの仕事ぶりは非常に真面目で信頼できる、と聞いています。これからの自衛隊にはプライドを持って日本を守って欲しいし、防大でもそう

いう教育をしてもらいたいですね」平素から集団教育の大切さを説いておられるという校長先生には、こんな言葉を寄せて頂きました。鈴木1曹に代表される学校系の隊員一人ひとりが各学校との信頼関係を築くことで、自衛隊を志す若者が増え、ひいては国民の自衛隊に対する理解度や期待もアップするわけですから、これもまた大切な仕事であることは確かですね。



清風高校 平岡校長

学校といえは、大学も忘れてはいけません。今回の取材の締めくくりとして、大阪工業大学で行われた合同企業説明会(就職フェア)に同行させてもらいました。25社ほどが机を並べている。公務員志向の人も多い昨今ですから、大学は自衛隊にとって大切な「お得意様」の一つ。自衛隊ブースはかなり盛況で、聞くほうも、説明するほうも自然と熱が入ります。説明員として頑張る大阪市北部担当の荒巻靖隆1等陸尉は、俳優の布施博さんのようなゴツイ外



相手が何を求めているのか早く見抜いて説明するのがポイントです／荒巻1尉

見とは裏腹に、身振り手振り、時にはジョークを交えた巧みな話術で学生を引きつけます。

「自衛隊のことを全く知らない人であるのか、給料や安定した身分に魅力を感じるのかなど、その学生さんがどんな人で何を求めているのかを素早く見抜いて説明するのがポイントです」

荒巻1尉はその言葉どおり、任務の幅広さをアピールしたり、公務員としてのステータスを強調したり、時にはパンフレットの戦車や飛行機について解説したりと、臨機応変に話を進めています。ユニークだったのは、

一般曹候補生や曹候補士のことを「中間管理職コース」と呼んでいたこと。自衛隊の昇任制度を民間に置き換えたわかりやすい説明は、学生さんの心をつちりと捕らえていたようです。

試験に合格しても民間企業の内定が出ればそちらに行く人もいるし、同じ公務員では警察や消防が強力なライバルだと言います。その中で、まずはこういう機会に自衛隊について知ってもらい、興味を持ってもらうこと。それだけでもかなり意味のある場だと思っ「んですよ」と荒巻1尉。ここでも「将来の収穫に向けて種をまく」ことの大切さを教えてもらいました。

今回見せてもらった募集業務は、実に幅の広いものでした。しかし募集の仕事とは結局、人間同士の信頼関係と結びつきに尽きるのではないのでしょうか。人を集め、人を育て、時には人に育ててもらおう。自衛隊という組織を形作る上での何よりの財産である「人」という資産は、地連隊員の努力と熱い情熱、そして多くの人々の協力によって育まれているんだな、ということが、今回の取材を通して身にしみてわかったような気がします。